

図書館史研究会 ニュース・レター

第32号 昭和63年7月10日

第6回 図書館史を考えるセミナー—緑蔭セミナー—の御案内

今年のセミナーは、肩のこらない、ノンビリとした、しかし内容のあるものを考えました。どうぞお気軽に参加して下さい。

日 時 1988年9月8日(木) 午後1時から

1988年9月9日(金) 午後4時まで

場 所 法政箱根荘(法政大学教職員保養所)

〒250-04 神奈川県足柄下郡箱根町強羅字向山

☎

定 員 先着20名

参加費 5,000 円

テーマ 特定せず。出席者が目下研究中のテーマにつき約20分間報告。

質疑討論(資料は各自で人数分準備して下さい)

申 込 希望者は「はがき」に報告テーマを簡単に記入してお申し込み下さい。

申込締切 7月31日必着

申込先

奥泉和久

※ 参加申込者には、後日振替用紙と会場案内図をお送りします。

研究委員会 委員長 石井 敦

委員 奥泉和久

ニュースレターの原稿を求めます。図書館史文献の書評、紹介を中心に、図書館史についての短文を希望します。枚数は400字×12枚程度まで。原則として原稿が到着した次号のニュースレターに掲載します。

送付先

※ 運営委員会報告 6月10日(金)に東京で開催した。

第6回セミナー(別掲)、「図書館史研究」(第5号)を中心に話あった。「図書館史研究」は、毎年夏期のセミナーに合わせて刊行してきたが、今年は若干遅れる可能性がある」と編集委員会から報告された。

今年度から、会員が年間に発表した図書館史についての論文などを、毎年度末にお知らせいただき、ニュースレターに掲載することになった。12月末までに、事務局宛に報告をお願いすることになりますので、よろしくご協力下さい。詳しいことや書式は、本年最後のニュースレターでお知らせ、お願いすることになります。

原稿を募集します

「図書館史研究」第6号の原稿(来年夏刊行)を募集します
テーマはいっさい限定せず、常時、原稿を受付けますので、ふるってご応募ください。

応募：原稿の送り先は下記のとおり。

小川 徹(編集委員長)

注意：400字詰め原稿用紙に30枚程度。

採否については編集委員会が検討する。

※ 事務局から

*前回のニュースレターに添付した会員名簿には、重複、欠落がありました。以後の新入会員も加えて新しく作りしましたので、差し替えて下さい。

*新入会員

*寄贈図書 中山正善 「本と天理図書館」

「北の文庫」第12~14号。第14号には、石井敦氏の「今日における図書館史研究の意義」(講演)が掲載。(連絡先、

北の文庫の会 藤島隆)

*会員の漢那憲治氏が「民衆と社会教育—戦後沖縄社会教育史研究」(エイデル研究所、4,500円)の第7章“沖縄公共図書館の成立と展開”を執筆。漢那氏の名前を通して注文すると2割引。エイデル研究所は☎

薄 久代編著 「色のない地球儀」によせて

阪田 蓉子（梅花女子大学）

本書を貫いているのは平和への願いである。色のない地球儀の逸話を通して、人類の文化的遺産を国際協力のもとに保存しようと願う人々の祈りを無残にも打ち砕いた戦争の無意味さと残酷さを図書館員の立場から描いている。他方薄さんが東京帝国大学の図書館に勤務されはじめた昭和19年から終戦に到る戦時の図書館の様子を、自身の体験を挿入しながら、当時図書館に関わっておられた有名無名を問わず多くの図書館人の種々の記録から掘り起こし、一冊の図書に編まれたのである。いわば東京帝国大学図書館の裏面史であり、これが本書の特徴でもある。それ故図書館に直接関わりを持たない読者の興味を引きつけたばかりかそのような読者に図書館の意義と図書館員の役割について考える機会を提供した。「オムニ」の特選書評欄（1988.2）がこの問題にふれていることから分かる。

また我々図書館人の興味と共感を呼ぶのも戦争が図書館に及ぼした影響が著者著書および先輩・同僚の体験を通して如実に語られているからである。平和を尊ぶ思いを縦糸に戦時下の図書館に働いた図書館人および館外においてこれを助けた人々の図書館に対する熱意の織りなす史実のひとつひとつが我々の胸を打つ。

地球儀の謎もさることながらベルギーのルーヴァン大学図書館の悲劇は、人類が古代から現代に到るまで同じ過ちを繰り返していることを痛切に思い知らせる。

1426年に創設されたルーヴァン大学は16世紀には反宗教改革的学問の牙城であったともいわれヨーロッパの名門のひとつであった。しかしその図書館は1914年に独軍の侵入により建物と貴重書を含む30万冊の蔵書を焼失してしまった。第二のアレキサンドリアといわれているほど文化史上その優れた蔵書の損失を惜しむ声は高かった。

第一次欧州大戦が終わった1918年に、米国でルーヴァン図書館再興のための寄付金の募集が始まり、翌年には国際連盟加盟国を中心に「ルーヴァン国際事業」が発足した。日本でも「此機ヲ以テ世界文明ノ進運ニ寄与シ、又日本文化ヲ泰西

「二伝ヘンガ為ニ」国際事業委員会が設けられた。1923（大正12）年7月に第一回委員会が開かれ、活動を開始しようとした矢先の9月に大震災が生じたのである。しかし12月には委員会を開き援助に向けて歩み始めた。震災後のため古書は高騰し収集は困難を極めたが、1924年から2年間に6回、ベルギーに向けて発送したのであった。

和田万吉東京帝国大学図書館長も委員の一人として、中心になって働かれた。和田氏はあれだけのよい書籍は、もう二度と集めることはできまいともらされたという。しかし1940年にこの図書館は再び戦火に見舞われ廃墟となってしまった。世界各国の支援により集められた蔵書とともに1928年に再興された図書館は70万冊の図書とともに灰燼と化した。

第一章で運命の大地球儀に寄せてブリュッセル条約と「知的協力委員会」およびベルギーと東京帝国大学図書館の再建にまつわる関わりが述べられるとともに当時図書館長であった和田万吉博士、姉崎正治博士について語られている。和田氏については、館長退任の契機のひとつとなった植松司書官の有り様に言及した今沢慈海氏宛の手紙が紹介されている。この件は和田氏にとってのみならず東京帝国大学図書館ひいては図書館界にとって悲劇的な事件であった。

ごくあたりまえのことではあるが、図書館もまた図書館人の無欲の熱意のみによって成り立つものではないことを、あらためて思い起こさせた。この挿話によって、かえって知的な世界になまなましが加わり読者の興味をそそる。植松司書官の名は帝国大学図書館協議会の議事録にもたびたび表れ、和漢書目録編纂規則規則編纂委員の一人として挙げられてもいる。これまで単に記録のうえでみかけていた名前に血肉がつき人格と化しドラマを形成し始める。このような人物の登場が図書館の世界にひとの息吹を与えて読者の共感を呼び説得力を増す。

東京大学図書館は大学図書館史上先導的な役割を果たしてきた。姉崎館長および岸本館長時代になされた一大改革がその後国立大学は云うに及ばず公立、私立、私立大学図書館にも多大な影響を与えた。もっとも東京大学が進めた改革だとい

うことで後に続いたのであって他の大学が試みても追随することにはならなかったとも云える。それはともかく姉崎館長は図書館建築において従来例のなかったことをいくつか試みたのであった。既に作成されていた図面をもってアメリカの図書館を見学しかつ各図書館長に意見を求め、帰国後設計の一部を変更した。例えばブックトラックを運びやすいようにフロアーの高さを一定にしたこと、指定書閲覧室を設けたこと、一時に1500人以上の利用者が利用できる閲覧席を設けたこと、各閲覧室に利用者が自由に取り出せる書架を設置したこと、書庫を図書館の建物の中に加えたことなどである。

これらの改善は図書の貯蔵と整理と利用との間の連絡を円滑にするため、ひいては「学問と教育との血液を供給する心臓というべき図書館」を重視し、図書館を大学の心臓として機能せしめるという意図のもとになされたのであった。姉崎図書館長、内田建築部長（工学部教授）などの報告にあらためて姉崎氏の新図書館に対する決意と当時の関係者の苦勞がしのばれるのである。

第二章において著者は戦時下の図書館の状況を叙述する。薄さんは昭和19年に図書館受入掛として図書館に勤められた。これを知り筆者は帝国大学図書館協議会の議題のひとつを思い起こした。昭和16年に開かれた協議会の折り、館長の懇話協議題のひとつとして次のことが話題になっている。「女子図書館員の養成並びに実際上の待遇向上を図ること、依って文部省図書館講習所に女子入学を奨励する件」であり、その理由は戦時下故の男子図書館員不足の為であった。この2年余り後に勤められたからさらに男子図書館員は少なくなっていたであろう。そして薄さんの記述にもあるのだが、そのうえ何人かの同僚達の出征を見送っておられる。

ともあれ学校を出てすぐ勤められたのである。まだ年若い薄さんは図書館の正面階段の踊り場で地味な服やモンベ姿ながらくるくる回って、あたかも舞踏会で踊っているような気分ひたったり、青空を眺めて戦時下の寒々とした世界から時折逃れておられたと回想しておられる。あるいは正門前の雑貨屋で化粧品クリ

ームを売っていたのに、買いそびれているうちにいつのまにかその店も空襲で焼けてしまいとても残念であったことなどを記しておられる。筆者は現在に到るまでこういったことを覚えておられて、エピソードとして挿入しておられるその感性が本書の魅力のひとつであると感じる。このようなしなやかな思いが膨大な資料のなかから、適確かつ心をうつ記録を選びだし、あたかも織物のように様々な史実と人々の思いを時に暗く、時に明るい彩りにして仕上げることができたのだろう。

戦時下の図書館の状況は頻繁に出される回覧や克明につけられた日誌などにより次第に緊迫してゆく周辺の様子も含めて描かれている。読み進むうちに読者はこの戦争にどのような意味があったのかを考えさせられる。いやほぼすべての戦いが人類にとってもたらず虚しさを伝えている。ひとりの人間として、また図書館人として平和を守り、人類の文化的遺産を人々の利用に供すとともに後世に伝えるべく保存に務めねばならないことを著者はせつせつと穏やかな口調で語りかけている。

薄さんは昨年図書館セミナーに参加し東京大学総合図書館の開架図書についてご経験からの意見を述べてくださったので覚えておられる方もおられると思う丁度その頃この本のあとがきを書いておられたようである。私は薄さんが図書館学資料室におられた頃からお世話になりその後館史資料室の資料を整理しておられた時には帝国大学図書館協議会の記録を見せていただいたりした。

清水正三氏の序文にもある「東京大学図書館史資料目録」は薄さんの汗の結晶である。古い資料がほとんどで紙も破れ易いザラ紙のようなものも多い。このような資料の目録を作製しながら、散逸しないように厚紙で表紙をつけたりなど、利用しやすい体裁に整えてくださったのである。「色のない地球儀」の著述および編纂に加えて「東京大学図書館史資料目録」作製とそれにまつわる一連のご苦労に対し心から感謝の意を表したい。